

スポット
ライト

14

胡玉眞弓

日本学術会議副会長／
慶應義塾大学名誉教授



多様性のある社会を 拓く女性薬剤師の トップランナー。

トップランナーは
小柄で華奢な笑顔が
チャーミングな人

内閣府の特別の機関で科学アカデミーの日本学術会議。我が国を代表する科学者が集う組織の副会長を務めるのは医薬品情報学の権威である望月真弓氏だ。おそらく、女性の薬剤師としてはトップランナーの立場にあると言って間違いない。

取得していれば、生計を立てられるだろう資格には、医師、薬剤師、弁護士、建築士、公認会計士、税理士など多くがある。だが、薬剤師以外は、男性の資格取得者の割合が高い。そのような薬剤師・薬学の世界でも、要職に就いているのは、ほぼ男性だ。

圧倒的な男性社会の中、おいそれとは就けないポジションにまで上り詰めたのは、どんな女性なのか。予想に反して、目の前に現れたのは、小柄で華奢な、笑顔がとてもチャーミングな人だった。まさに偏見で勝手に「女傑」のイメージを持っていたことが恥ずかしくなる。

取材の前にリクエストされたのは、「時間は限られているので、すでに公表している情報は、資料を読んでほしい。できれば、それ以外のことを話し

たい」。実にスマートな申し出に彼女らしさを感じながら、取材はテンポ良く始まった。

ロイヤルブルーの
ワンピースで見事
製薬会社に入社

1970年代、女性の社会進出やキャリア形成を阻む障壁は、今より、はるかに高く、見上げるほどだっただろう。しかし、望月氏は、大学受験を控え、果敢にも「自立して生きたい」と薬剤師の道を選ぶ。

「女は結婚して家に入る」が当たり前の風潮に飲み込まれずにいたのには先進的な思想を持つ両親の影響があったようだ。

「子どものころから『女性でも手に職を持ち、自分の力で生活できるようになりなさい』と言われました。父と議論するのが好きだったので、弁護士も考えたのですが、憧れの女性の先輩が千葉大学薬学部に進学したのをきっかけに薬剤師をめざすようになり、同じ大学に進みました」

大学生活を終えるころ、卒業生のほとんどが企業へ就職していたのになら、不器用で実験が苦手だった望月氏は、製薬会社のデスクワークを志望する。ところが、あいにく世の中は石油

ショックの直後で就職難に見舞われていた。しかも、男女別の求人が認められており、男女問わずに新卒を募集していた製薬会社は、日本ロシユ株式会社（当時。以下、日本ロシユ）と、もう1社だけだった。

先に結論を言えば、見事、狭き門を突破して日本ロシユに採用されたのだが、「合格の決め手は、ロイヤルブルのワンピース」だと、笑いながらも真剣に話す。

「会社訪問時、地味なベージュのスーツと白いシャツを着ていたところ、大卒OGの社員の方に『外資系だから、もつと明るい服でアピールしたほうが良いわよ』とアドバイスされました。そこで、似合うかどうかは、あとまわし。思い切つて、鮮やかなロイヤルブルーのワンピースを着て面接を受けたのです。入社できたのは、そのおかげだと思つています」

ワンピースの色が合否の決め手になったはずはないが、きつと彼女の内なるものを引き立てたに違いない。

薬剤師のはずなのに 治療薬を知らず 医療現場を見たくなる

入社後は、希望した学術部に配属されると、面接の恩人であった大学の先

輩に導かれる。

「その方から学術のイロハを教えてください。ただ、自社製品は無論、他社の競合品や開発中の薬剤の情報を収集し、MRや医療機関からの質問へ対応する仕事に夢中になりました」

社会人になって初めての仕事が、期せずして、現在の医薬品情報の教育・研究の原点となったわけだ。

このように、順調に滑り出したと思われた社会人人生だが、必ずしも望んだ仕事ができるとは限らないのが会社員の常。

「学術部から診断薬を取り扱う試薬部に異動を命じられた。そもそも実験が苦手で、デスクワークを選んだのに、結局、実験をやるはめになってしまいました」

しかし、これが幸運にも、次のキャリアにつながっていく。

「実は、疾患から離れた仕事をしていたので、『薬剤師だから』と、家族や親戚から治療薬について質問をされても、なかなか答えられません。『自分には、なんのために薬学部で勉強したのか』とモヤモヤした気持ちになり、一度、医療現場に出てみたいと思うようになったいました。

そんな折り、診断薬の開発をするための実験でおつき合っていた縁で北里大学病院の薬剤部に転職がかなったのです」

薬剤師業務と研究 忙しい日々の中で 博士号を取得

北里大学病院薬剤部では、試験研究室で、調剤業務のみならず、院内製剤の規格試験や薬物血中濃度の測定、抗真菌薬の研究などを行った。

「薬剤師の仕事は、だいぶ遅れてのスタートとなったため、年下の先輩から厳しい指導を受けながら鍛えてもらいました」

臨床と研究の忙しい日々をつづけながらも、博士号の取得をめざす。

「薬剤部長がすばらしい方で、実務を行う一方で論文も執筆し、学位を取ることを推奨されていた。私も、内臓真菌症の研究で学位を取得できました」

その後、以前、学術の仕事をしていたことを知っていた薬剤部長から推薦され、医薬品情報室に異動する。

「ここで、企業の学術部での経験が活きます。そして、医師や薬剤師からの問い合わせへの対応や新規採用薬の評価などをする中で、医薬品情報がいかに重要かを再認識しました」

「医薬品情報の教育をする」必要性を知る機会も訪れた。

「母校の恩師との出会いで、大いに触発されたのです。恩師は、『21世紀の

医薬品のあり方に関する懇談会』のメンバーで、その最終報告において医薬品の適正使用と医薬品情報の重要性を指摘された方でした。

北里大学病院薬剤部では、薬学部の学生実習を熱心に受け入れており、私も学生指導にやり甲斐を感じていました。その方の影響もあり、医薬品情報を教えたいと強く思うようになっていきました。医薬品の有効性や安全性に関する情報を収集・分析し、より正しく安全な医薬品の使用に反映。さらに有益な情報を創薬にフィードバックする役割まで担う医薬品情報学は、薬剤師のバイタルスキルとも言え、大学で教えないで良いわけがありません。どうも、この人には、絶好のタイミングで転機が訪れるようだ。1997年、母校の千葉大学から医薬品情報学の助教授として招聘され、教育者の歩みを始めることになる。

青天の霹靂の闘病生活 患者の気持ちを知って 医療の本質に気づく

千葉大学で助教授を務めた後、再び北里大学へ転じ、いよいよ教授に。医薬品情報学の研究と教育にいつそうの力を注いでいた最中、予想もしなかった事態が起こる。悪性腫瘍が見つかったのだ。当時の胸のうちを次のように打ち明けてくれた。

「なぜ、自分が――」。多くの患者さんの気持ちがわかった瞬間です。抗がん剤治療の副作用で、頭髮がゴソソリ抜けてしまったのが、何よりショックでした。

感染症を防ごうと、手洗いや口腔ケアなどあらゆる注意を払っていたのに感染して熱が出てしまい、どんなに注意しても報われない現実があるのだとも思い知らされました。

闘病生活は苦しかったが、自ら罹患したことで患者の苦しみを理解できるようになったと同時に、「医療は、どうあるべきか」との根本的な問いにも思いついた。

「ある夜、吐き気がして眠れずにいると、巡回中のベテランの看護師さんが『大丈夫ですか。あたたかい飲みものを持ってきましょうか』と声をかけてくれた。すると、不思議と気持ちが落ち着き、眠れたのです。

医療者は、患者に寄り添うべきと言われますが、実際は難しい。でも、その看護師さんは、私をよく見て、話を聞き、自分にできる行動を取ってくれた。医療の本質は、患者の気持ちを理解し、患者のために考え、行動することだと、身をもって知りました」

独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA）のウェブサイトに

『患者副作用報告システム』のもとになる仕組みを考案した原動力は、闘病経験だったと言う。

「副作用に最初に気づくのは患者さんです。副作用の兆候を患者さんの感じた言葉で報告していただき、将来の副作用の早期発見や重症化防止につなげたい、患者さんのために絶対に必要な仕組みだと信じてプロジェクトに取り組みました」

病院薬剤部長も兼務 薬の待ち時間の 大幅な短縮に成功

2007年、共立薬科大学に転出。翌年には大学の合併により慶應義塾大学教授に就任した。2015年からは慶應義塾大学病院（以下、慶大病院）薬剤部長も兼務する。北里大学病院で積んだ経験を發揮し、研究はもちろん臨床業務でも腕を振るう。代表例が、院内処方膨大で有名だった慶大病院ならではの、外来患者の「待ち時間問題」の解決だ。

「体調が悪くて受診している患者さんを長くお待たせしないよう、計数調剤などの対物業務の効率化が、喫緊の課題でした」

課題解決に向け、望月氏は遅い始動のハンディなど感じさせない、薬剤師

としての面目躍如の活躍を見せる。

鑑査のステップが多く、オーバー鑑査になっていたところはバーコードリーダーの導入でリスク管理をし、薬剤師数が不足している部分はSPD（院内物流管理）の外部委託を導入することでカバーした。一方、病棟業務を推進するため、新人教育プログラムを改革して土台になる人材養成に力を入れる。5年目までの退職者が多かった職員の採用制度を徐々に変え、良い人材の定着を図った。さらに、内閣府が進める『AIホスピタル』の事業に慶大病院が採択された際には、調剤ロボットや夜間の薬剤の運搬ロボットを導入し、入院調剤業務の効率化を成し遂げたのだ。

「結果、外来患者の待ち時間が減少して、薬剤師が対人業務へシフトする余裕も生まれました。また、病棟常駐型薬剤業務のトライアルを開始し、半年後には完全常駐が実現しました」

日本医薬品情報学会を立ち上げ、コアカリの項目にも影響を及ぼす

時計の針を千葉大学の教員に転じたころに戻そう。先に触れたように、当時、彼女には薬学部で医薬品情報学の教育を強化したいとの思いがあった。

すると、これに呼応するかたちで意気投合したメンバーたちが集まり、1998年、なんと学会を立ち上げる。日本医薬品情報学会（現・一般社団法人日本医薬品情報学会／以下、JASDI）だ。

「JASDIでは、教育検討委員会を設置して、『薬学領域における医薬品情報学教育の在り方に関する研究―最終報告案について―』を取りまとめました。

この報告書は、薬学教育6年制開始に先立って策定された『薬学教育モデル・コアカリキュラム』にも大きな影響を与え、医薬品情報は医療薬学と実務実習に入ったのです」

数名のメンバーだったJASDIは今、900名を超すまでに成長。医薬品情報専門薬剤師・認定薬剤師制度も運営するほどになっている。

日本学術会議で専門薬剤師制度のあり方を提言する

2020年からは、日本学術会議副会長の任を担っているが、初めて参加したのは十数年前にさかのぼる。そして、同会議で最初に手がけたのは、専門薬剤師のあり方の検討だった。「専門薬剤師分科会が設けられ、私が

委員長に就任し、『提言 専門薬剤師の必要性和今後の発展―医療の質の向上を支えるために―』を发出了しました」

同分科会では、専門薬剤師が果たすべき役割の明確化と社会に対する質保証が必須になると提言した。これをきっかけに大きく変わったのが、がん専門薬剤師だ。認定の母体が、日本病院薬剤師会から学術団体の日本医療薬学会に移管され、認定要件も刷新。学術的な資格の質の担保により、薬剤師の資格としては初めて医療法上の広告標榜が可能となった。専門薬剤師が、大きく一歩、前進したと言えよう。

次世代のために女性研究者の比率3割超えをめざす

そして今、臨んでいるのは、研究領域での女性進出のあと押し。

「日本学術会議の男女共同参画分科会で『大学や研究機関での女性の活躍を推進する』ための提言をまとめている最中ですが、日本の大学や研究機関における女性進出が世界水準から見ても遅れているのを痛感します。

たとえば、集団の構成人数の3割を占めると、意思決定に影響力を持つという『黄金の3割』と呼ばれる理論があります。先進国のほとんどでは、指



導的立場にある女性研究者の割合が、この黄金の3割を超えているのに対して、日本はかなり低い状況が続いています」

薬学部の教員に目を向けても、多くの大学で女性学生が5〜6割を占めるが、教員となると、助教こそ女性が3割はいるものの、講師・准教授は2割程度、教授にいたっては国立大学の場合で1割を切っている。

「女性教員比率の3割目標の設定に関しては、全体では女性教員の7割が肯定的であるのに対して、男性教員の肯定者は5割にとどまります。」

分野別では、人文・社会科学系は男女ともに7割前後ですが、医学や薬学系は女性6割、男性4割で、人文・社会科学系の男性教員のほうが、ジェンダー平等への理解が進んでいるようです。薬学系の男性教員は、やや保守的

だと言えるでしょう」

ただし、女性側にも課題があると指摘する。

「せつかく管理職の仕事を打診されたのに、断る女性は少なくありません。時系列をさかのぼれば、中学まで理数系が得意だった女性が、高校に入ると文系に進路変更するケースもよく見受けられます。教員に加えて生徒本人も『女性なら文系に進むべき』とのアンコンシャス・バイアスを抱えてしまっているのですね。」

このように、ジェンダーは非常に根深い問題ですが、もちろん、諦めません。多様性の視点も入れて、さまざまな人々が活躍できる社会をつくっていきます」

印象的だったのは、男性社会である現状を述べるも、自らの来し方を語る時、女性であるがゆえの生きづらさをいつさい、口にしなかったこと。上をめざすなら壁があるのは、男性も同様。壁の高さに不満を言わず、性差の及ばない「知」の力を信じて克服してきた証だろう。

小さな体のどこにそんなパワーが隠されているのか不思議だが、こうした足跡をたどってきた彼女なら、現状に風穴を開け、多様性のある社会を拓いてくれるはず。知力をもって気高く輝きつづける望月氏には、今でもロイヤルブルーが、よく似合う。

PROFILE

もちづき・まゆみ

- | | | | |
|-------|-------------------------------------|-------|---|
| 1976年 | 千葉大学薬学部製薬学科卒業
日本ロシュ株式会社学術部 | 2013年 | 慶應義塾大学薬学部長・研究科委員長 |
| 1983年 | 北里大学病院薬剤部 | 2015年 | 慶應義塾大学病院薬剤部長兼務 |
| 1992年 | 医学博士（北里大学） | 2016年 | 慶應義塾大学薬学部教授（病院薬学講座） |
| 1997年 | 千葉大学大学院薬学研究科助教授
（医療薬学専攻医薬品情報学講座） | 2019年 | 慶應義塾大学名誉教授
慶應義塾大学薬学部特任教授
国際医学情報センター顧問 |
| 2000年 | 北里大学薬学部教授（臨床薬学研究センター医薬品情報部門） | 2020年 | 国際医療福祉大学特別顧問
日本学術会議副会長 |
| 2007年 | 共立薬科大学教授（医薬品情報学講座） | 2021年 | 大日本住友製薬株式会社
（現・住友ファーマ株式会社）社外監査役 |
| 2008年 | 慶應義塾大学薬学部教授（医薬品情報学講座） | | |
| 2009年 | 慶應義塾大学薬学研究科医療薬学専攻長 | | |